

インド工科大学（IIT）の卒業生だ。IITはイギリスからの独立後間もない、1951年に創設された国立高等教育機関。西ベンガル州の「カラグプル校」を皮切りに7カ所にキャンパスを設置し、国内の理工系人材の育成に貢献してきた。さらに近年では、国のさらなる成長を担う人材を育成するため8校の新設を決定。その一つ、IITHを支援すべく、東京大学の松本洋一郎理事・副学長を委員長に、組織の垣根を超えて、日本の9大学※2、民間企業、関連省庁、JICAが「IITH支援コンソーシアム」を立ち上げた。

まず取り組んだのが、新しいキャンパスの建設だ。図書館、国際会議場、学生会館など大学の中心となる施設の建設をJICAが円借款で協力。さらに東京大学大学院工学系研究科の藤野陽三教授、建築家の大野秀敏教授が中心となってデザインを支援している。「消費電力の節約のために自然エネルギーを利用したり、実験器具や設備の入れ替えが簡単にできるような、実験室の壁を取り外し形式にしたりなど工夫をしています」と藤野教授。何十年も先を見据えて進められているキャンパス開発計画。IITHの理工系人材の育成に向けた熱い思いを形にすべく、東大の研究チームは奮闘している。



9月に現地で行われたセミナーでは、IITHと日本の大学が今後のネットワーク強化に向けて、活発に意見交換を行った

**両国の大学間で
技術の共有を図る**

国境を超えて、学生や研究者の行き来が盛んな今日。日本の大学でも、さまざまな国からの留学生を目的にすることが珍しくない。しかし、8万人の中国人留学生、2万人の韓国人留学生に対して、インドからの留学生はわずか500人。インドの人々にとって、日本は主要な留学先としてあまり視野に入っていない。

そこで今年1月にJICAが開始したのが、「インド工科大学ハ

イデラバード校 日印産学研究ネットワーク構築支援プロジェクト（通称：FRIENDSHIPプロジェクト）」。日本の研究者の派遣、インドからの留学生の受け入れ、産学連携の推進などを通じて、両国間の教育、研究交流を促進し、日本とインドが、理工系の分野において共に成長していくことが目的だ。

「日本に初めて来た時、この国で学んでみたい、働いてみたいと思いました」。早稲田大学西早稲田キャンパスにある実験機器がひしめく研究棟の一室、FRIENDSHIP

「能力の高いインドの留学生を受け入れることは、日本の大学の国際化や活性化にもつながる。インド側も、日本との共同研究を通じて日本の高い技術を実証することにとっても意欲的です」。慶應義塾大学とIITHの共同研究に初期から参加し、現在はIITHの訪問助教として活躍している片岡広太郎さんは話す。

大学という新たなフィールドでつながったインドとのネットワーク。IITHで生まれる未来を担う人々と技術が、インドの発展、さらには日本の活力となるに違いない。

DSHIPプロジェクトの支援によるIITHからの留学生ラジャ・ゴピナスさんが、少し緊張した面持ちでパソコンに向かっていった。「留学するなら日本以外は考えられなかった」という彼は、これから2年間、早稲田大学院で機械工学を学ぶ。

今年9月には、両国の大学関係者の合同セミナーがIITHで開かれた。日本の大学から参加した教授陣はそれぞれの研究テーマについて紹介。その一人、九州大学のハザリカ・ヘマンタ教授はIITマドラス校の卒業生。インド人の研究者の視点から見た、日本の大学の魅力は、IITHの教授や学生にとっても興味深かったようだ。

「能力の高いインドの留学生を受け入れることは、日本の大学の国際化や活性化にもつながる。インド側も、日本との共同研究を通じて日本の高い技術を実証することにとっても意欲的です」。慶應義塾大学とIITHの共同研究に初期から参加し、現在はIITHの訪問助教として活躍している片岡広太郎さんは話す。



今年9月から早稲田大学院に留学中のラジャ・ゴピナスさん。「日本には世界有数の車の製造メーカーがたくさんある。インターンシップなどにも挑戦したい」と意欲的だ

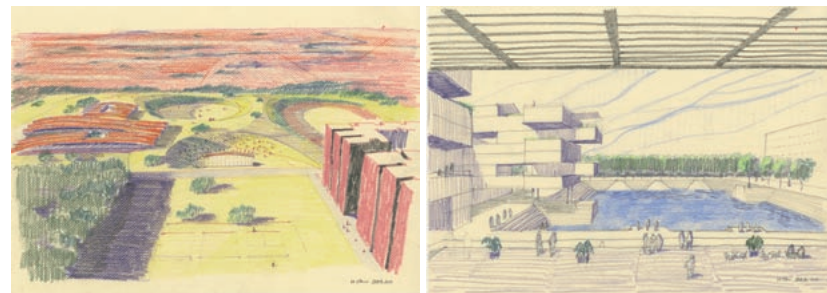
※1 独立行政法人科学技術振興機構（JST）とJICAが連携し、日本の科学技術を活用して地球規模課題解決のために開発途上国の関係機関と共同研究を行うプログラム。
※2 東北大学、東京大学、慶應義塾大学、早稲田大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、立命館大学、九州大学。

**インドの将来を担う
人材を育てる**

「地震の被害を軽減するには？」
「まずは、災害の兆候の早期発見、発生直後の状況把握は不可欠ですよね」
「そのためには、地震・気象データを収集して、分析する情報基盤を作らなければ」
インド中南部、インド工科大学



キャンパスのデザインについて議論する東京大学とIITHのメンバー



東京大学の教授直筆のIITHのキャンパスのスケッチ。ここから模型を作り、実際のイメージへと近づけていく

大学の知がつなぐ ネットワーク

理工系の大学の中で、世界トップクラスを誇るインド工科大学。インド各地にキャンパスを持つこの大学が、中南部の都市ハイデラバードに新たな拠点を構えた。その名は「インド工科大学ハイデラバード校（IITH）」。

JICAは日本国内の大学と連携しながら、IITHとのネットワークづくりを進めている。

ハイデラバード校（IITH）の実験室。インドと日本の研究者たちが熱い議論を交わしている。彼らは、慶應義塾大学、東京大学、IITHの教授陣。地球規模課題対応国際科学技術協力事業（SATREPS）※1を通じて実施している「自然災害の減災と復旧のための情報ネットワーク構築に関する研究」の研究チームだ。慶應義塾大学環境情報学部の村井純教

授を中心に、2009年から、日本とインドをフィールドに防災分野の共同研究を進めている。

インドといえば、IT産業に代表されるように、理工系の技術者を要する産業が盛んだ。その成長を支えているのは、何と言っても優秀な人材。多くが、インド国内でトップクラス、世界でも有数の理工系大学と言われているイ

現在は仮校舎で授業が行われているIITH。気象センサーからデータを取得するサーバーの構築について議論するインド人学生と片岡訪問助教（左から2番目）

